

## 「伝統の創造」を通じた中越地震後のコミュニティ再編 Community Reorganization through “Creation of Tradition” after the Mid-Niigata Prefecture Earthquake in 2004

坂田寧代  
SAKATA Yasuyo

**1. はじめに** 自然災害や人口減少・高齢化に直面する中山間地域では、集落などの地域コミュニティをどのように形成していくかが模索されている。新たな「土地改良長期計画」（平成 28 年 8 月 24 日閣議決定）には、「社会資本の継承・新たな価値の創出と農村協働力の深化」が基本理念として掲げられた<sup>1)</sup>。平成 29 年度の農業農村振興整備部会の配付資料には、「多様な主体が住み続ける魅力ある農村社会の構築」のために「農業・農村構造の変化により“地縁的な”農村協働力の充実を図るとともに、今後は、集落を越えた地域、都市の人々等新たな社会的関係を導入した“開かれた”農村協働力への期待の拡大」と記載されている<sup>2)</sup>。同資料によれば、農村協働力には、内部結束型、結合型、橋渡し型の 3 種類があり、結合型と橋渡し型が「開かれた農村協働力」とされている。ここで、内部結束型は地縁的なもの、結合型は地縁的なものと行政との結合、橋渡し型は農村内の地縁的なものどうしの橋渡し、または、地縁的なものと都市との橋渡しとされている。

一方、内山<sup>3)</sup>は、「邑の復興」を「地方創生」と関連づけて論考し、目指す先が「伝統回帰」であることを述べている。有田<sup>4)</sup>は、歴史や風土を「地域に住み続けあるいは訪れる人たちによって形成され引き継がれた、精神的あるいは物的・肉体的な記憶の総体とでもいうべきもの」とし、「これらと対峙すること無しに、地域コミュニティや地域開発の今後を望見できない」としている。

以上のことから、中山間地域の復興・振興における伝統、歴史、風土のもつ意味を考えることは、住民が主体的に地域形成を進め、行政等がそれを支援する上で示唆を与えると思われる。

そこで本報告では、2004 年新潟県中越地震で被災した旧山古志村（2005 年 4 月から長岡市山古志地区）を対象として、地域コミュニティを内部結束型と橋渡し型に分類しながら、中山間地域の復興・振興における地域コミュニティの形成を伝統の創造との関連で示す。調査は事例調査とし、2013～2017 年度の 5 年間に行った聞き取り・参与観察をもとに整理した。

**2. 事例地区の概要** 山古志地区には 14 集落が存在しているが、うち 3 集落で構成される三ヶ地区（池谷集落、檜木集落、大久保集落）と木籠集落を事例として選定した。これらの集落は地盤災害に特徴づけられる中越地震により甚大な被害を受け、避難指示の解除が最も遅い 2007 年 4 月 1 日であったため、帰村は 2007 年末となり、避難生活は 3 年余りに及んだ。また、長期の避難生活は帰村住民の人口減少と高齢化に負の影響を与えた。復興着手の遅れと人口減少・高齢化の進行が著しいこれら集落の復興軌跡をたどることは中越地震による被災集落の復興を理解する上で有効と考えた。三ヶ地区の 3 集落と木籠集落は、帰村後の 2008 年以降 10 世帯前後で推移しており、集落規模は小さい。

**3. 内部結束型の三ヶ地区** 三ヶ地区の特徴は、組織化を地区内の複数集落で行ったり、構成員として中越地震前の集落住民を単位として考えたりするなど、内部の結束を重視した組織化にある。

まず水稲営農組合は、集落単独で営農組合を立ち上げた1集落を除いた2集落で組織化された<sup>5)</sup>。在村の非農家や中越地震による離村の通作農家を構成員としている。また、集落単独では継続困難となった「さいの神」と盆踊りを三ヶ地区の3集落合同で行っている<sup>6)</sup>。さらに、伝統野菜かぐらなんぼんの保存を目的とした山古志かぐらなんぼん保存会は、三ヶ地区が中心となって山古志地区全体で取り組んでいる。保存会設立のきっかけとなったのは、中越地震による避難先の仮設住宅で作付け・収穫・採種が続けられたことであり、帰村後の2010年に設立された<sup>7)</sup>。仮設住宅で三ヶ地区がまとまって入居していたことや、保存会会長を長く務めることになるリーダーが存在したことから、三ヶ地区は保存会を牽引してきた。かぐらなんぼんが他地域で栽培されないように山古志の住民が山古志で栽培することを基本としてきたため、保存会は内部結束型の特徴を有している。

三ヶ地区は、営農組合、集落伝統行事、保存会において、内部結束型といえる。

**4. 橋渡し型の木籠集落** 木籠集落は近隣集落との結束よりも外部者、とくに山古志地区の住民と地縁・血縁関係にない都市住民と連携している点に特徴がある。組織の変遷はあるが、2007年から一貫して都市住民を中心とした組織が木籠集落の伝統行事や共同作業の継続に協力してきた<sup>6), 8), 9)</sup>。組織化を牽引した木籠集落のM氏は、山古志地区の伝統行事「牛の角突き」を中越地震後に復活させた立役者であり、2010年に設立された山古志闘牛会の会長でもあった。山古志闘牛会は牛のオーナー制を導入することにより、都市住民も運営に参画する仕組みを構築した<sup>10)</sup>。

M氏を中心として組織化された木籠集落の協力組織および山古志闘牛会は、橋渡し型といえる。

**5. 伝統の創造を通じたコミュニティ再編** 以上のように事例地区のコミュニティ再編を内部結束型と橋渡し型に沿って分類したが、共通点として「伝統の創造」を見出すことができる。営農組合も保存会も水稲とかぐらなんぼんという地域で継承されてきた伝統を、集落住民を中心とした組織によって新しい方途を模索している。集落の伝統行事と共同作業を継続するための三ヶ地区と木籠集落の取組みや、伝統行事を継承するための山古志闘牛会の活動についても、伝統が単に引き継がれるだけでなく、集落合同や都市住民との連携によって新しい価値を創造しようとしている。中山間地域の復興・振興を進める上で伝統の創造を基調としたコミュニティ再編が有効と考えられる。

**6. おわりに** 生業、伝統行事や共同作業を復活・継承していく上で組織化は個別に進められるが、地域全体の復興のためには、生業、伝統行事や共同作業を総体として捉えることが大切である。

#### 引用文献

- 1) 農林水産省：土地改良長期計画について、<http://www.maff.go.jp/j/press/nousin/keityo/attach/pdf/160824-1.pdf>
- 2) 農林水産省農村振興局：資料3 社会情勢の変化を踏まえた次世代の農業・農村の構築について、[http://www.maff.go.jp/j/council/seisaku/nousin/bukai/h29\\_1/attach/pdf/index-17.pdf](http://www.maff.go.jp/j/council/seisaku/nousin/bukai/h29_1/attach/pdf/index-17.pdf)
- 3) 内山 節：邑の復興、農村計画学会誌、34(4)、pp.440~443 (2016)
- 4) 有田博之：風土・歴史への眺望、農業土木学会誌、71(3)、pp.1~2 (2003)
- 5) 坂田寧代、落合基継、吉川夏樹：非農家も参加する営農組合による中山間地域の農地維持、水土の知、83(11)、pp.11~14 (2015)
- 6) 坂田寧代：伝統行事を介した震災復興のコミュニティ再編、水土の知、82(3)、pp.15~18 (2014)
- 7) 中山桃花、坂田寧代：中山間地域の高齢農家による伝統野菜栽培のための人的支援、水土の知、86(2)、pp.15~18 (2018)
- 8) 坂田寧代：震災復興のコミュニティ再編における外部者の編入、水土の知、82(10)、pp.27~30 (2014)
- 9) 坂田寧代：都市農村交流団体の会員特性からみた持続要因、水土の知、85(1)、pp.23~26 (2017)
- 10) 坂田寧代、藤中千愛、落合基継：伝統行事「牛の角突き」復活後の地域外者の地域への参画、水土の知、85(1)、pp.43~46 (2017)